

縦隔に進展した深頸部膿瘍の症例の検討

寶地 信介 橋田 光一 池 嵯 祥 司

大久保 淳一 大淵 豊明 鈴木 秀明

産業医科大学 医学部 耳鼻咽喉科

深頸部膿瘍は、画像検査の進歩によって早期診断・加療が可能になってきたが、縦隔まで炎症が波及すると治療が難渋し、時として致命的な状態に至ることもある緊急性の高い疾患である。今回我々は、当科において過去12年間に入院加療を行った深頸部膿瘍41症例のうち、縦隔まで炎症が波及した7例を対象に臨床的に検討を行ったので報告する。年齢は36歳から86歳、男性5例、女性2例であり平均年齢は68.7歳であった。

平均入院期間は49日間であり、3例に糖尿病の合併を認めた。感染経路として、菌性感染を2名、咽頭炎、扁桃炎、喉頭蓋炎など急性上気道感染を4名に認めた。6例は胸部外科と合同で手術を施行し、全例救命できた。5例は初診時CRPが20以上であり、縦隔病変を合併しない深頸部膿瘍例と比較してもより高値であった。起炎菌として *Streptococcus milleri group* が4例と高頻度に検出されており、既知の報告の通り本菌の深頸部膿瘍への病態形成の関与が考えられた。